

礫川※〔#「イ＋湊のつくり」、第3水準1-84-33〕※〔#「イ＋羊」、第3水準1-84-32〕記

永井荷風

青空文庫

何事にも倦果てたりしわが身の、なほ折節にいささかの興を催すことあるは、町中の寺を過る折からふと思出でて、その庭に入り、古墳の苔を掃つて、見ざりし世の人を憶ふ時なり。

見ざりし世の人をその墳墓に訪ふは、生ける人をその家に訪ふとは異りて、寒暄の辞を陳るにも及ばず、手土産たづさへ行くわづらひもなし。此方より訪はまく思立つ時にのみ訪ひ行き、わが心のままなる思に耽りて、去りたき時に立去るも強て袖引きとどめらるる虞なく、幾年月打捨てて顧ざることあるも、輕薄不実の譏を受けむ心づかひもなし。雨の夜のさびしさに書を読み、書中の人を思ひ、風静なる日その墳墓をたづねて更にその為 人を憶ふ。この心何事にも喩へがたし。寒夜ひとり茶を煮る時の情味聊これに似たりともいはばいふべし。

わが東京の市内に残りし古碑断碣、その半は癸亥の歳の災禍に烏有となりぬ。山の手の寺院にあるもの、幸にして舞馬の災を免れしといへども、移行く世の氣運は永く市塵繁華の間に金石の文字を存ぜしむべきや否や。もしこれ杞人の憂ひにあらずとなさんか、掃墓の興は今の世に取残されしわれらのわづかにこれを知るのみに止りて、われらが子孫の

世に及びては、これを知らんとするもまた知るべからざるものとはなりぬべし。

掃墓のかんじぎょう間事業は江戸風雅の遺習なり。英米の如き実業功利の国にこの趣味存せず。たまたまわれ巴里パリにありてこれあるを見しかど、既に二十年前のことなれば、大乱以後の巴里の人士今なほ然るや否や知るべくもあらず。江戸時代にありて普くあまね探墓の興を世の人に知らしめし好奇の士は、『江戸名家墓所一覽』の一書を著せし老樗軒ろうちよけんの主人を以てまづはその鼻祖ともなすべきにや。『墓所一覽』の梨棗りそうに上せられしは文政紀元の春なること人の知るところなり。

春秋の彼岸は墓参の時節と定められたり。しかれども忘れられたる古墳を尋ねとむ弔はんには、秋の彼岸にはひあし既に傾きやすく、やうやうにして知れがたき断碑を尋出して、さて寺の男に水運こけばせ苔を洗つたひ蘿を剥はがして漫まんかんせる墓誌なぞ読みまた写さんとすれば、衰へたる日影の蚤はやくも春うすつきて蝸ひぐらしの啼きしきる声ひときこ一際耳につき、読難き文字更に読難きに苦しむべし。春の彼岸には風なほ寒くして雨の氣遣きづかはるる日もまた多きをや。花見の頃は世間さわがしければ門をいづる心地もせざるべし。八重の桜も散りそむる春の末より牡丹ぼたんいまだ開かざる夏の初こそ、老軀杖ろうくをたよりに墓をさぐりに出づべき時節なれ。長き日を歩みつづけて汗ばむ額も寺の庭に入れば新樹の風ただちにこれを拭ひ、木の根石の端に腰かくる

も藪蚊^{やぶが}いまだ来らず、醜草^{しごぐさ}なほはびこらざれば蛇のおそれもなし。苔蒸す地の上には落花^{はな}なほみだれてあり。日の光にかがやく木の芽のうつくしき雨に打れし墓石の古びたるに似もやらねば、亡き人を憶ふ心落葉の頃にもまさりてまた一段の深きを加ふべし。

ことし甲子^{かつし}の暮春、日曜日にもあらず大祭日にもあらぬ日なり。前夜の雨に表^{おもて}通^{どおり}も

砂ほこりをさまりて、吹き添ふ微風に裏町の泥濘^{ぬかるみ}も大方はかわきしかと思はれし昼過^{ひるご}。

丸の内より神田^{かんだ}を過ぎて、小石川原町^{こいしかわはらまち}なる本念寺^{ほんねんじ}に大田南畝^{おおたなんぼ}の墓を弔ひぬ。われ小石川

白山^{はくさん}のあたりを過る時は、必本念寺^{かならず}に入りて北山^{ほくざん}南畝^{なんぼ}両儒の墓を弔ひ、また南畝^{なんぼ}が後^ご

裔^{うえい}にしてわれらが友たりし南岳^{なんがく}の墓に香華^{こうげ}を手向^{たむ}くるを常となせり。震災の時これら

の墳墓^{ふんぼ}いかなりしや。殊に南畝^{なんぼ}の墓碑^{たふひ}はこの兆域^{ちよういき}にても形大なるものなれば、倒れ

砕けはせざりしやと心にかかりてゐたりしが、この日行きて見るにその位置少しく変りし

のみにて石は全^{まった}かりき。南岳^{なんがく}の墓^ぼは本^{もと}のところ^{ところ}に依然として立ちたり。自然石にて面に大

田南岳墓^{だなんがくぼ}。碑陰にまつくろな土瓶^{どびん}つゝこむ清水かなの一句を刻す。これ南岳^{なんがく}の句にして小

波巖谷^{なみのいわや}先生書する所、石もまた巖谷翁^{いんがくおん}の贅^しを捐^すてて建てられしものなり。われ初て南岳^{なんがく}

と交^{まじ}を訂^わせしは明治三十二年の頃清朝の人にして俳句を善くしたりし蘇山人^{そざんじん}羅臥雲^{らがうん}が平^{ひらか}

川天神祠畔^{わてんじんしはん}の寓居^{いみ}においてなりけり。南岳^{なんがく}諱^なは亨^{こう}。野口幽谷^{のぐちゆうこく}の門人^{もんじん}なり。初陸軍士^{はじめて}

官学校に入らむとして体格検査に合格せざりしかば、素志を翻して絵事に従へるなり。その初武を以て身を立てんと欲せしはその家世 征夷府に仕へて徒士たりしによれるもの歟。南岳少くして耳聾せり。人と語るに音吐鐘の如し。平生奇行に富む。明治卅八年秋八月日魯両国講和条約の結ばれし時、在野の政客暴民を鼓煽し電車を焼き官庁を破壊す。輦轂の下巡邏を見ざることに数日に及べり。市民各その欲する所を恣にする事を得たりしかば、南岳白日をまとはず釣竿を肩にして桜田門外に至り綸を御溝に垂れて連日鯉魚十数尾を獲て帰りしといふ。また大婚式記念郵便切手の発行せられし時都人各近隣の郵便局に赴き局員に請ひて、記念当日の消印を切手に捺せしむ。南岳輒春画を描きたる絵葉書数葉を手にし郵便局の窓に抵りて消印を請ふ。局員裏面の絵画に心づかず消印をなすこと三、四葉にして初て驚愕の声を発す。この時おそし南岳猿臂を伸べ絵葉書を奪つて疾走す。後に人に語つて曰くこれ洵に敝家の宝物なり。子孫の繁栄を祝するものけだしこれに優るものあるを知らずと。その為人おほむねかくの如し。かつて上野なる日本美術協会の展覧会に出品して褒状を得たり。褒賞授与の日川端玉章手づからこれを南岳に与へしに、南岳一礼して手に取るや否や、寸断して脚下に放棄し、悠々としてその席に還りて坐す。満堂の画人皆色を失ふ。南岳おもむろに鄰席を顧て曰く諸君驚くことなかれ、我狂

するにあらず。唯平生川端玉章の為人を好まず、従つてその手に触れしもの我これを受ける
 ことを欲せざるのみと。爾來復ふたたび浮名を展覽會場に争はず。閑居自適し、時に藥草を後園に
 栽培して病者に与へ、また『田うごき草』と題する一冊子を刊刻してその効驗を説く。人
 戲たわむれに呼んで田うごきの翁おきなとなせり。南岳また年々土中に甕かめを埋めて鈴虫を繁殖せしめ、新
 涼の節を待つてこれを知友に頒わかつ。南岳を知るものの家秋に入つて草虫琳りんろう琅ろうの声を聴か
 ざる処なし。知友また呼ぶに鈴虫の翁を以てす。南岳は弓術の達人にしてまた水府すいふりゆう流遊
 泳の師たりき。大田南畝おわたなんぼが先人自得翁すいれんの墓誌を見るに、享保二十年七月、將軍吉宗公中川
 狩獵の時徒兵の游泳けみを閱するや自得翁水練に達したるを以て嘉賞する処となりしといふ。
 されば南岳の水練に巧なるけだし来由する所ありといふべきなり。大正四、五年の頃南岳
 四谷の旧居を去つて北総市川の里に徙うつり寒暑昼夜のわかちなく釣ちようぎよ魚を事とせしが大正
 六年七月十三日白昼江戸川の水に溺れて死せり。人その故を知るものなし。あるひは言ふ
 水中にあつて卒中症を發したるならんと。時に年四十又三なり。その配中村氏は南畝先生
 が外姑がいこの後裔こうえいなり。容姿艷麗そのいまだ嫁せざるや近鄰称するに四谷小町よつやこまちの名を以てし
 たりしといふ。某男某女あり。嗣子しし名は大。家を継ぎしが本年の春病んで歿したりしと。
 われこの日始てこれを寺僧に聞得て愕然がくぜんたりき。因ちなみにしるす南岳が四谷の旧居は荒木町

絃歌^{げんか}の地と接し今岡田とかよべる酒樓の立てるところなり。この日兼てより写し置かんと思ひゐたりし南畝^{なんく}が室富原^{むつもと}氏の墓誌を手帳にしるす。墓誌の終に悼亡^{とうぼう}の詩六首を刻したり。『蜀山集』に出でたればここに録せず。

本念寺を出で白山^{はくさんごんげん}権現の境内をよこぎりわづかに人力車を通ずべき垣根道を北へと歩み行けば、坂の下に蓮久寺とよべる法華寺あり。これ去年癸亥^{きがい}七月十二日わが狎友^{こうゆう}唾々^{あかし}子井上精一君が埋骨のところなり。門に入るに離々たる古松の下に寺の男の落葉掃きゐたれば、井上氏の塋域^{えいいき}を問ふ。導かれて行くにまだ一周忌にも到らざれば、冢土^{ちようど}新にしていまだ碑碣^{ひけつ}を建てず。傍^{かたわら}なる妣某^{はは}氏の墓前に香華^{かうけ}を手向^{たむ}けて蓮久寺を出づ。われは今日に至りても唾々子既に黄土に歸せりとの思をなすこと能^{あた}はず。この日子のわれと共にあらざるは前夜の酒を病みなぞして約に背^{そむ}きて来らざるが如き心地のせらるるのみ。世に竹馬^{ちくば}の交をよろこべるものは多かるべしといへども、子とわれとの如く終生よく無頼の行動を共にしたるものは稀なるべし。学生の頃悪少年を以て目せられしものは、儕輩^{せいはい}の中子とわれとの二人なり。十六、七の頃には俱に漢詩を唱和し二十の頃より同じく筆を小説に染めまた俱に俳諧に遊べり。わが狎妓^{こうぎ}の窃^{ひそか}に子と情を通じたるものあり。子の情婦にしてわれのこれを奪ひしものまたなしとせず。けだし這般^{しゃはん}の情事は烟花場裏一夕の遊戲に

して新五左衛門等の到底解し得べきところに非ざるなり。われ田舎の人より短冊を乞はる
 ることあるや常に咂々子が句を書して責を塞げり。われ俳才なく自作の句を記憶せず。こ
 れを憶ふ時子の名吟まづわが念頭に浮びいづるを以てなり。旧交を追想して歩を移すほど
 に、いつしか白山御殿町を過ぎ、植物園に沿ひたる病人坂に出づ。坂の麓に一古寺あり。
 門に安閑寺の三字を掲げたり。ふと安閑寺の灸とて名高き艾を售りしはこの寺なり。われ
 ら稚き頃その名を聞きてさへ恐れて泣き止みしものと心づけば、追想おのづから縷々と
 して糸を繰るが如し。その頃植物園門外の小径は水田に沿ひたり。水田は氷川の森のふも
 とより伝通院兆域のほとりに連り一流の細水潺々としてその間を貫きたり。これ旧記
 にいふところの小石川の流にして今はわづかに窮巷の間を通ずる溝となれり。ああ四
 十年のむかしわれはこの細流のほとりに春は土筆を摘み、夏は螢を撲ちまた赤蛙を捕へん
 とて日の暮るるをも忘れしを。赤蛙は皮を剥ぎ醬油をつけ焼く時は味よし。その頃金富
 町なるわが家の抱車夫に虎蔵とて背に菊慈童の筋ぼりしたるものあり。その父はむ
 かし町方の手先なりしか。老いて盲目となり悴虎蔵の世話になり極楽水の裏屋に住ひ
 るたり。虎蔵わが供をなして土筆を摘み赤蛙を捕りての帰道、折節父の家に立寄り夕餉の
 菜にもとて獲たりしものを与へたり。貧しき家の夕闇に盲目の老夫のかしらを剃りたるが、

兀然^{ごつぜん}として仏壇に向ひて鉦叩^{かね}き経誦^{きよ}める後姿、初めて見し時はわけもなく物おそろしくおぼえぬ。わが家の女中ども虎蔵がおやちはむかし多くの人を捕へ拷問なぞなしたる報^{むくい}にて、目も見えぬやうになりしなりと噂せしが、虎蔵もやがてわが家より暇取^{いとま}りし後いつか牛込警察署の刑事となり、わが十七、八の頃一番町の家に來りて、ゆうべは江戸川端の待^{まち}合^{ちあひ}にて芸者の寝込を捕へたりなぞ、その後家に來りし車夫に語りあたりしを聞きし事ありき。極楽水の麓^{めづ}を環^{めぐ}りし細流のほとりには今博文館の印刷工場聳え立ちたれば、その頃仰ぎ見し光円寺の公孫樹^{いちよう}も既に望むべからず。小家の間の小道を上りて久堅町^{ひさかたまち}より竹^{たけ}早^{やちよう}町の垣根道を過ぐるにかつて画伯^{あさ}浅井忠^{いぢゆう}が住みし家の門前より、数歩にして同心^{どうしん}町^{ちよう}の康衢^{こうく}に出づ。電車砂塵を捲^まいて來^{らい}往^{おう}せり。道の向側は切支丹坂^{きりしたんざか}に通ずる坂の下口にて、旧丹後舞鶴の藩主牧野家の黒板塀、玄関先の老樹と共に四十年のむかしに変わる所なければ、なつかしさのあまり覚えず歩を止む。切支丹坂より茗荷谷^{みよがだに}のあたりに知れる人の家多かりき。今はありやなしや。電車通を伝通院の方に向ひて歩みを運べば、ほどなく新坂^{しんざか}の降口^{おりぐち}あり。新樹の梢^{こすえ}に遠く赤城の森を望む。新坂にはわが稚き頃大学総長浜尾氏の邸^{やしき}、音楽学校長伊沢氏の邸^{おざき}、尾崎^{おざき}号堂^{がくどう}が儼^{しゆうきよ}居^{もんしやう}、門^{もん}牆^{しやう}を連ね庭樹の枝を交へたり。この坂車を通ぜざりしが今はいかがにや。電車通を行くことなほ二、三町に

してまた坂の下口おりぐちを見る。これ即金剛寺坂すなわちんこうじざかなり。文化のはじめより大田南畝の住みたりしうぐいすだに鶯谷は金剛寺坂の中ほどより西へ入る低地なりとは考証家の言ふところなり。嘉永板の切絵図きりえずには金剛寺の裏手多福院に接する処明地あきちの下を示して鶯谷とはしるしたり。この日われ切絵図はふところにせざりしかど、それと覺しき小径に進入らんとして、ふと角の屋敷を見れば幼き頃より見覚えし駒井氏の家なり。坂路を隔てて仏蘭西人アリベと呼びしものの邸址やしきあと、今は岩崎家の別墅べつしょとなり、短葉松植ゑつらねし土墻つじは城塞めきたる石塀となりぬ。岩崎家の東鄰には依然として思案外史しあんがいし石橋氏の居きよあり。遅塚麗水ちづかれいすい翁またかつてこのあたりに鄰を卜ぼくせしことありと聞けり。正徳しょうとくのむかし太宰春台だざいしゅんだいの伝通院でんすういん前に帷を下せしは人の知る処。礪川こしかわの地古来より文人遊息の処たりといふべし。さてわれは駒井氏の門前より目指せし小路を西に入るに、ここにもまた幼き頃見覚えたりし福岡氏の門あり。福岡氏は維新の功臣なり。門前の小径は忽たちまちにして懸崖けんがいの頂に達し紐ひもの如く分れて南北に下れり。崖下に人家あり。鶯谷は即このあたりをいふなるべし。さるにても南畝が遷喬楼せんきやうろうの旧址はいづこならむ。文化五戊辰ぼしんの年三月三日、南畝はここに六秩ろくちつの賀筵がえんを設けたる事その随筆『一話一言』に見ゆ。大窪詩仏おおくぼしふつが『詩聖堂詩集』巻の十に「雪後鶯谷小集得庚韻」と題せるもの南畝の家のことなるべし。

し。
その作に曰く

遷喬樓在懸崖上
闌干方与赤城平
霞氣不消連旬雪
万瓦渾如粧水晶
疑在広寒清 府
四望生眩総瑩瑩
主人愛客兼愛酒
暇日開宴迎客傾
衣冠何須挂神武
与身并忘刀筆名
我是江湖釣漁客
平生不曾接冠纓
十里泥濘深於海
今日肯来訂酒盟

「遷喬樓は懸崖の上に在り
闌干は方に赤城と平らなり
霞氣も消さず連旬の雪
万瓦は渾て水晶を粧うが如し
疑うらくは広寒清虚の府に在るか
と
四望は眩を生じて総て瑩瑩たり
主人 客を愛し兼ねて酒を愛し
暇日 宴を開き 客を迎えて傾す
衣冠何ぞ須ん神武に挂ることを
身と与に并て忘る刀筆の名
我は是れ江湖の釣漁の客
平生曾て冠纓に接せず
十里 泥濘 海よりも深けれども
今日 肯て来たりて酒盟を訂ぶ

唯応爛醉報厚意

唯だ応に爛醉して厚意に報ゆべく

対君不酔作麼生

君と対して酔わずんば作麼生せん

また六樹園ろくじゆえんが狂文『吾婦なまり』あづまに鶯谷のさくら会と題する一文ありて、勾欄こうらんの前

なる桜の咲きみだれたるが今日の風にやや散りそむといへど、今はそれかとおぼしき桜の古木もさぐるによしなし。このあたり今は金富町かなとみちようと称ふれど、むかしは金杉水道町かなすぎにして、南畝なんそがいゆる金曾木かなそぎなり。懸崖きんげには喬木きやうぼくなほ天を摩まし、樹根怒張りはして巖石いふの状さまをなせり。澗道かんどうを下るに竹林の間に椿の花開くを見る。人家の犬籬りはの間より人の来るを見て吠ゆ。宛然でんか田家の光景なり。細径に従つて盤回すればおのづから金剛寺の域さかいに出づ。寺はわづかに堂宇を遺すのみにして墓田は尽く人家となりたれば、旧記に見る所の実朝さねともの墓も今は尋ねべきよすがもなし。本堂の前を過ぎ庫裏くらと人家との間の路地に入るに、迂回して金剛寺坂の中腹に出でたり。路地の中に稚おさな頃見覚えし車井戸くるいどなほあるを見たり。大都こうその康莊こうそうは年々面目を新にするに反して窮巷きゆうかう屋後の湫路しゅうろは幾星霜を経るも依然として旧觀あらたを革めず。これを人の生涯に觀るもまたかくの如き歟か。人一たび勢利の巷ちまたに奔馳ほんちするや、時運に激せられて旧習に晏如あんじよたる事能あたはず。たまたま鄰人の新聞紙をよみて衣服改良論となうを称るものあれば忽雷同たちまちして、腰のまがつた細君にも洋服をまとはしめ、

児輩の手を引いて、或時は劇場に少女歌劇を見、或時は日比谷街頭に醜陋なる官吏の銅像を仰いでその功績を説かざるべからず。然るに独吾輩の如き世間無用の間人にあつては、あたかも陋巷の湫路今なほ車井戸と総後架とを保存せるが如く、七夕には妓女と彩紙を截つて狂歌を吟じ、中秋には月見団子を食つて泰平を鼓腹するも、また人のこれを咎むることなし。幸なりといふべし。

金剛寺坂の中腹には夜ごとわが先考の肩揉みに来りし久斎とよぶ按摩住みたり。われかつて卑稿『伝通院』と題するものつくりし折には、殊更に久を休につくりたり。

久斎姓は村瀬名は久太郎といへり。その父寅吉といへるは幕府の御家人なりしとか。わが家金富町より一番町に移りし頃久斎は病みて世を去り、その妻しんといへるもの、わが家来りて炊爨浣滌の勞を取り、わづかなる給料にて老いたる姑と幼きものとを養ひぬ。わが父三たび家を徙して、終に燕息の地を大久保村に卜せられし時、衡門の傍なる畝、菑の樹陰に茅葺の廃屋ありて住むものもなかりしを、折から久斎が老母重き病に伏したりと聞き、わが母上ここに引取り、やがて野辺のおくりをもなさしめ玉ひけり。しん深くこの恩義に感じてや、先考館舎を捐てられし後は、一際まごころ籠めてわが家のために立ちはたらきぬ。大正七年の暮われ先考の旧居を人に譲り琴書を築地の儼居に移

せし時、しんは年漸く老い、両眼既におぼろになりしかば、その悴せがれの既に家を成して牛うしご
 込築土めつくどに住みたりしをたより、次の年の春暇いとまを乞ひてわが許を去りぬ。去るに望みて、
 御用の節にはいつにても御知らせ下さりましたさしづめ来月の大掃除にはお手つだひに上り
 ませうと言ひゐたりしがそのかひもなく、一月あまりにして突然身まかりし趣、悴のもと
 より言越いいこし来りぬ。享年六十余歳。流行感冒かかに罹りて歿せしといふ。しん逝ゆきて後ここに
 幾年、わが家再びこれに代るべき良婢を得ざりき。しんは武州南葛飾郡新宿の農家に生れ
 固より文字を知るものにもあらざりしかど、女の身の守るべき道と為すべき事には一とし
 て闕かくところはあらざりき。良人おとこにわかれて後永く寡かを守り、姑を養ひ、児を育て、誠実
 の心を以てよく人の恩義に報いたり。われ大正当今の世における新しき婦人の為す所を見
 て翻ひるがえつてわが老婢しんの生涯を思へば、おのづから畏敬の念を禁じ得ざるも豈偶然あにならん
 や。しんの墓は小日向水道町こびなたすいどうちようなる日輪寺にありと聞きしのみにて、いまだ一たびも行
 きて弔とむらひしことなければ、この日初夏ひあしののなほ高きに加へて、寺は一牛鳴いちぎゅううめいの間にあ
 るをさいはひ杖を曳きぬ。路傍に石級せききゆうあり。その頂いただきに寺の門立ちたり。石級の傍別に
 道を開きて登るに易やすからしむ。登れば一望忽曠然たちまちとして、牛込赤城うしごめあかぎの嵐光人家らんこうを隔て
 て翠色すいしょくしたた滴らむとす。供養くようの卒塔婆そとばを寺僧にたのまむとて刺しを通ぜしに寺僧出で来りて

わが面を熟視する事良久にして、わが家小石川にありし頃の事を思起したりとて、ここに端なく四十年のむかしを語出せしもまた奇縁なりけり。

やがて寺のしもべ来りて兆域に案内す。兆域は本堂のうしろなる丘阜にあり。石磴を登らむとする時その麓なる井のほとりに老婆の石像あるを見、これは何かと僕に問へば咳嗽のばばさまとて、せきを病むもの願を掛け病癒れば甘酒を供ふるなりといへり。この日も硝子罎の甘酒四、五十本ほども並べられしを見たり。靈験のほど思ひ知るべし。

日輪寺を出で小日向水道町を路の行くがままに関口に出で、目白坂の峻坂を攀ぢて新長谷寺の樹下に憩ふ。朱塗の不動堂は幸にして震災を免れしかど、境内の碑碣は悉くいづこにか運び去られて、懸崖の上には三層の西洋づくり東豊山の眺望を遮断したり。来路を下り堰口の瀑に抵り見れば、これもいつかセメントにて築き改められしが上に鉄の釣橋をかけ渡したり。駒留橋のあたりは電車製造場となり上水の流は化して溝※となれり。鶴巻町の新開町を過れば、夕陽ペンキ塗の看板に反映し洋食の臭気芬々たり。神楽坂を下り麴町を過ぎ家に帰れば日全く昏し。燈を挑げて食後戯にこの記をつくる。時に大正十三年甲子四月二十日也。

青空文庫情報

底本：「荷風隨筆集（上）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年9月16日第1刷発行

2006（平成18）年11月6日第27刷発行

底本の親本：「荷風隨筆 三」岩波書店

1982（昭和57）年1月18日第1刷発行

※「漢詩文の訓読は蜂屋邦夫氏を煩わした。」旨の記載が、底本の編集付記にあります。

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。

※誤植を疑った箇所を、親本の表記にそって、あらためました。

※「南畝」と「南畝」の混在は、底本通りです。

※表題は底本では、「礫川※[#「イ＋湊のつくり」、第3水準1-84-33]※[#「イ＋羊」、第3水準1-84-32]記《れきせんしょうようき》」となっています。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年5月28日作成

2019年12月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

永井荷風

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>